

研修報告

第6回近畿美術館博物館・美大研修「アートの最前線、鑑賞と体験を通じて今後の美術教育を学ぶ」

○活動期間…令和5年8月4日(金)、5日(土)

○活動場所…北加賀屋エリア(大阪市住之江区)・あべのハルカス美術館
大阪芸術大学スカイキャンパス(大阪市阿倍野区)

奈良県立畝傍高等学校 松野 潤一

今回、奈良県からは2名が参加。1日目は、大阪市住之江区にある「北加賀屋エリア」周辺を散策。2日目は、大阪市阿倍野区にある「あべのハルカス美術館(ハルカス16階)」と「大阪芸術大学スカイキャンパス(ハルカス24階。現在は閉館)」で、AR技術についての研修を受けた。

1日目(8月4日)、天王寺からバスで移動し、住之江区の北加賀屋千島ビルにて、おおさか創造千島財団(千島土地株式会社)のスタッフの方から、北加賀屋の歴史や変遷についてお話を伺った。



大正時代から1970年代の高度経済成長期まで「造船業の町」として栄えた北加賀屋エリアは、産業構造の変化によって、その後、工場の移転が相次いだという。約4万㎡もの広大な土地を持つ「名村造船所大阪工場」も建造物を残したまま移転し、1988年に千島土地株式会社へ土地が返還された。ただ、しばらくはそのまま遊休不動産となっていたそうである。転機となったのは2004年。芸術の実験場として再活用しようとする試みとして、アートプロジェクト「NAMURA ART MEETING '04-'34」が開催されることになり、会場として、造船所大阪工場跡地が無償提供されたことが大きなきっかけとなっていた。

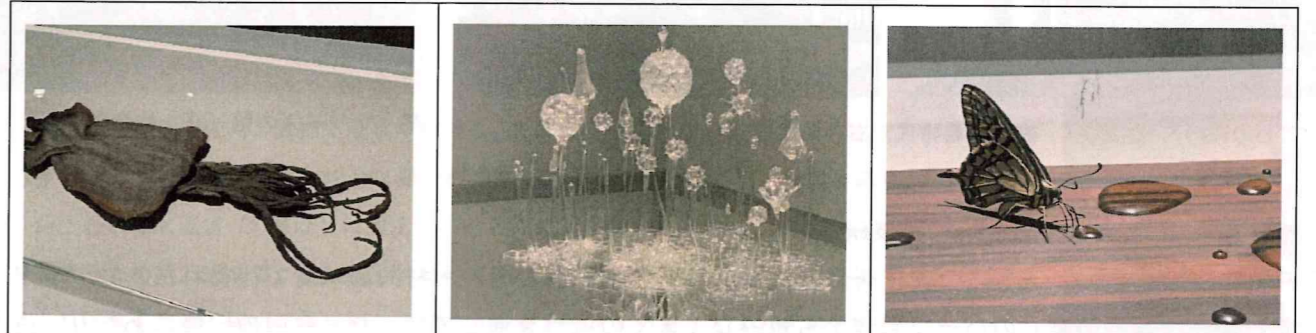
翌2005年、恒常的な創造の場として活用するため、跡地内の旧事務所棟などを改装し「クリエイティブセンター大阪(CCO)」が誕生。アートを通じて魅力的な街を再生していこうと、今日まで盛り上がりを見せている。クリエイティブを発信する場・恒常的な文化発信を行う場として活用していくために、大阪を芸術文化の拠点とするべく、さらなる発展を遂げている地域である。



地下鉄四つ橋線「北加賀屋」駅前から散策を開始したが、「クリエイティブセンター大阪(名村造船所大阪工場跡地)」をはじめ、旧工場・倉庫跡を改修した大型アート作品収蔵庫「MASK(MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA)」、旧鉄工所住宅の8室を一般向けの賃貸住宅として改装した「APartMENT」、旧名村造船所倉庫をアーティストやクリエイターのためのシェアスタジオを含む複合施設「SSK(Super Studio Kitakagaya)」など、多くの魅力的な施設を見学することができた。散策の最後には、同じく大阪市住之江区にある、大阪府立港南造形高等学校を訪れた。校内で開催されていた、校内作品展を鑑賞した。



2日目(8月5日)は、あべのハルカス16階にある、あべのハルカス美術館にて『超絶技巧、未来へ!明治工芸とそのDNA展』を鑑賞しました。同美術館で2019年に行われた企画展の第2弾で、今回は明治工芸だけでなく、現代美術作家の作品も多く展示されていた。漆芸・陶磁・木彫・刺繍絵画など、様々な素材や技法を駆使した作品群は、どれも非常に細やかで、古典と現代の美術作品の競演が見事な展示であった。



その後、24階の大阪芸術大学スカイキャンパスに移動。同大アートサイエンス学科で実践されている、AR(Augmented Reality=拡張現実)についての講義を受けた後、実技研修があった。テクノロジーとアートを掛け合わせて、新しい価値を創造するアートサイエンス学科の講義研修を受けて、最先端の技術は私たちの発想や構想をさらに拡張してくれる、そのような可能性と新しい波の到来を強く感じた。

今回の研修では、テーマにもある通り、「アートの最前線」を体感することができた。現代アートは創造や技術の追求だけでなく、これまでの創造や技術、意味や価値観についての再検証や再発見が同時に行われてきた。だからこそ、常に新しい形のアートが創造され更新されていることを学ぶことができた。今回の研修で学んだことを、授業実践に生かしていけるように工夫していきたい。

